

「ヒカゲカケテンジユ」——実在する禍

テンジユ科

危険度：☆☆☆☆☆

生息数：☆☆☆☆☆

生態

ヒカゲカケテンジユはテンジユ科の中でも決まった場所でのみ目撃される禍として知られている。細長い幹とわずかな枝を持ち、必ず全長が入りきる日陰に生えているところを確認されるのである。薄暗い場所しか存在できないというその姿からは儚げな印象を受ける者も多いという。

この禍は人間を「エネルギー」に起因する存在にしていると考えられている。本書ではエネルギーとは質量や熱量、運動量、活力、動機などを指す。

解説

生物にとつて基本的に全ての活動はエネルギーに起因するものである。食事による単純な栄養素の摂取、睡眠による肉体や脳

の効率的な使用による熱量の節約などはその最たるものであろう。人間にとつてもその原則は変わらず、食事のための行動が多種多様な仕事になっていたり、肉体や脳の休息のプロセスが複雑になっているだけである。

また分かりづらい部分として、子孫を残すという行動もエネルギーに起因する行動である。生物は生まれてから死ぬまでにエネルギーを消費するが、それを死後の自分のために残す手段を持たない。つまり一つの個体は総合的に見ればエネルギーの収支をプラスにすることはできないのである。しかし自分の「子孫」を自分と同一の目的を持つ仲間だと見れば話は変わる。自分と異性の二つの個体が二つ以上の個体(子孫)を自分と同様に育て上げたり、少ない個体数であつても彼らがそれ以上の子孫を残すために使えるエネルギーを貯蓄した状態にしてあげることができれば生涯の「エネルギーの収支」をプラスにしたと言えるのである。ヒカゲカケテンジユは人間にそれらに対する「欲求」を与えている。食欲、睡眠欲、性欲といった三大欲求、また社会的欲求もほとんどが上記の目的を達成するための欲求であり、人間に与えられたものなのである。

しかし、それでは生物とは「エネルギー」を稼ぐために存在しているのかと言えばそれ

は違う。この話の中では「そもそもなぜ生物が生きていく必要があるのか」という疑問に触れられていない。生物の起源については様々な憶測がなされているが、未だにその真実にたどり着いた者はいない。ましてやそれが必然であつたのか偶然であつたのかなどという部分については憶測するための要素さえ存在していない。つまり生物がエネルギーの収支をプラスにして存在し続ける

「目的」があるのかも知れないということである。それは言い換えれば「自分が何の為に生きているか」という疑問にも等しい。しかし人間がその疑問に対して自分なりの答えを出したとき、それは人類の平和や繁栄、または自分自身の心の平穏など、エネルギーに結びつくものになってしまうのである。

対処法

ヒカゲカケテンジユは「自分が何の為に生きているか」という「疑問そのもの」以外の全ての思考を作り出した禍である。この禍が存在しなければ人間は始まりの「目的」のみを持つた存在だったのかも知れない。この禍が存在することによってその「目的」の達成が容易になったのか困難になったのか、はたまた可能になったのか不可能になったのか、それは誰にも知ることはできない。

